

広報

# しがや

11月15日

昭和53年(1978) No.581

編集

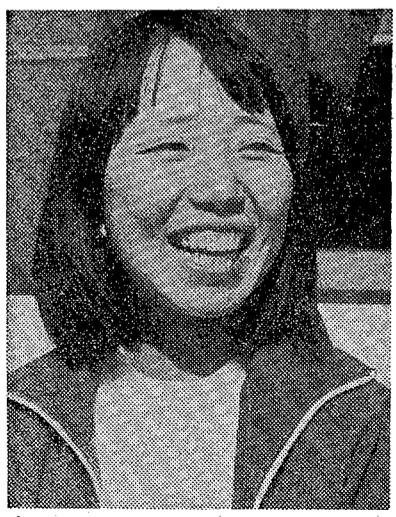
越谷市役所企画部広報課

昭和53年9月5日第3種郵便物認可  
毎月2回(1日・15日発行)



越ヶ谷久伊豆神社

七五三



秋風が吹き、西の空に黒雲がかかり  
その間からさみしそうな音が顔をめざ  
かせる。そんな時、故郷の父母を思い  
出し、帰りたい衝動にかられる。  
越谷に来五年目、近所ともつき合  
いが始まり、知人も多くなり、時には  
はつまちで会われる。そんな時さみし  
さを忘れてしまう。ここに来て、近所  
とのつき合いの大切さを知りました。  
ひとは越谷の西のはづれ大袋、野菜  
の出荷に忙しい農家の人々、広々とし  
た衣田での稲刈り、のどがまだまだ  
静かさがある。

子供たちの明るい笑顔と共に私の一  
日の仕事が始まる。無頼の可能性を持  
った子供たち、私の手でいくらかでも  
伸ばしてあげられたらと毎日頑張って  
いる。子供たちに四季の移り変わりを  
充分に観察させてあげ事ができる。  
船の観察、ザリガニ取り、乳牛見学、  
時にはお弁当を持って近くの広場へお  
散歩、園外保育に出た時の子供たち  
の顔、自然にふれた喜びが金身にある  
静かさがある。

立冬が過ぎ、朝夕はめっきり寒さを覚えるようになった。それでも日中は風  
も少なく、暖かな毎日が続くこともあり、それを小春日和といふ。そんな日  
和のなか、市内の各神社では、七五三の宮参りをする親子の姿が見られる。男  
の子は三歳、五歳、女の子は三歳、七歳に当たる子どもをつれて宮に参る行事  
は古くからの風習だが、常解(おひとき)、袴着(はかまき)などともいわれ  
る。

## 仲間とともに

### 地域活動の場を

大竹八三 富田 栄子

秋風が吹き、西の空に黒雲がかかり  
その間からさみしそうな音が顔をめざ  
かせる。そんな時、故郷の父母を思い  
出し、帰りたい衝動にかられる。  
越谷に来五年目、近所ともつき合  
いが始まり、知人も多くなり、時には  
はつまちで会われる。そんな時さみし  
さを忘れてしまう。ここに来て、近所  
とのつき合いの大切さを知りました。  
ひとは越谷の西のはづれ大袋、野菜  
の出荷に忙しい農家の人々、広々とし  
た衣田での稲刈り、のどがまだまだ  
静かさがある。

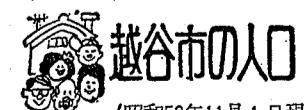
地域の少年や青年とゲームやサーク  
ル活動を通して多くの仲間をつくりた  
い。いつも忘れないもの、それは  
若者の青春の思い出だと思う。長い  
人生生きがいと明るさを与えてくれ  
るもの、それは青春の日々。とねだけ  
充実した青年らしい生き方をしてきた  
かの心に残したい。そう思って始め  
た青年年活動である。

相談員として積極的に活動し、自己  
研さんし、好み、責任を持つて青少年の  
指導者、援助者になるために多くの研  
修会に参加し、自己を磨くと共に、地  
域でのミニミニティーに貢献したい。  
共通の目的を持つ仲間と一緒に活動する  
は達成できることが経験できる。仕  
事に追われながらの活動ではあるが、仕  
事と職場で得られない  
貴重なものが得られ  
る。

まだまだ私達の活動  
はこれからである。映  
画会、レクリエーション等を通して少しでも  
地域青少年の交流を役  
立つてほしいと思う。



市制20年をむかえて



(昭和53年11月1日現在)  
(住民基本台帳)

	総人口	前月比
男	21万1177人	358人増
女	10万6554人	187人増
世帯数	10万4623人	161人増
	6万744世帯	114世帯増

# ふるさとこしかいや



向畠の古利根川

草加、越谷、千住の先よ……  
日光街道沿いの宿場町として栄えたわがまち越谷。平坦でなだらかな土地がどこまでも続き、起伏に乏しい越谷の自然はいわゆる観光地とはほど遠い。はるかに見はるかす山なみも少なく、京都や奈良のような史跡もない。しかし、越谷にはあることがある。水郷の四季がうつろうさまは美しく、それは私たちの誇りである。あるさとこしがや、そこには、長いあいだ土と共に生きてきた越谷びとの汗が光っている。

## 川と越谷



絵に詩に人びとに愛されてきた水郷こしがや

『綾瀬、古利根、元荒川の水が磨湯の越谷育ち……』  
新「越谷富頭」にもうたわれているとおり、越谷は川の多いまちである。清流を集めて走る溪流、いく筋にも伸びゆく川、別名坂東太郎ともいわれ、関東平野をうねうねと貫流する利根川のようにならうしい川。このように川にはそれぞれの貌(かお)があるが、越谷を流れる川はいずれも、とうとうと実にのびやかな流れをみせている。川は、越谷に縁したたる肥沃な土地をたらしめた。丹精こめて作られてきた米は、越谷米としてつとに有名だった。土に生きてきた人びとにとって、川の恩恵浴するところが大きい。

最近、行田市にある稻荷山古墳から出土した鉄劍銅鏡が解説され、大きな話題になつたが、関東の国ごとに草くから開けていた。見田方(越谷市大成町)住居跡の出土品その他からも、越谷が比較的早い時期から開けていたことがわかる。これは古墳後期から奈良朝にかけての遺跡と推定される。見田方住居跡のかつての住民は、川のそばの小高い丘に生活共同体としての集落を作っていた(越谷の歴史物語参考)。

川は魔物でもあった。ひとたび川が怒ると、恐しい洪水にまみされた。越谷周辺の沖積底地には、古利根川、元荒川が集流したので、台風による洪水の氾濫によって水害を蒙ることが多い。このかけがえのない自然が時流れにしたがって、その姿を変えてることはやむを得ない。だが、越谷ひとの生まれた土地に対する愛着心は変わることがないだろう。

水郷こしがやは私たちのふるさとである。のびやかな自然、おおらかな越谷ひとの氣性、私たちにはふるさとのここを次代へ残していく使命がある。ふるさとが急速に変貌していくなかで、いつしか水郷に集まる鳥たちが少なくなった。いつの日にか、鳥たちが帰ってくる日がくるだらうか。そんなふるさとにならなければならない。水と緑と太陽のまち、それは私たちの誇りである。

越谷ひとの生活は川とのたたかいでもあり、川を中心とした景観は美しい。野良で一日の仕事を終え、ほっと汗をぬぐう人びとの顔に夕陽が照り映える。まことに焼けた空のかなたを標

た。明治十九年に御所地の指定をうけた。そこは彼等にとって憩いの場であり、渡り鳥がしばしば落葉を休めた。夕暮れの空を、雁がささやかにささやまな水鳥が舞い、羽音がきかれた。飛んでいくのがみられた。

このように、川は四季折々の情趣をみせ、人びとの心にやすらぎをもたらしていったのである。地味ではあるが、温潤な越谷びとの気風は、こうした風土が育んできたものといえる。

毎年、苗代と季になると、広大な水田地帯のかんがい用に使われる数多くの用水には、満々と水が溝えられる。この季節はまさに水郷こしがやの風景にふさわしく、休日には授網をしたり、釣糸をたれ人らの姿が、土手のあちこちに見られる。

昔もいまも、水郷こしがやを讀み、絵画に、詩にその情緒を愛した人びとが多い。このかけがえのない自然が時流れていたがって、その姿を変えていくことはやむを得ない。だが、越谷ひとの生まれた土地に対する愛着心は変わることがないだろう。

水郷こしがやは私たちのふるさとである。水神も離島も今は無いが、こ

### 越谷の歴史物語より

## 越谷八景

八景」は当時の越谷の面影を傳はせてくれる。  
瓦曾根の帰帆 当時、川船も重要な交通機関であった。米・桃・梅・野菜・味噌などを運ぶ荷船が、いずれも瓦曾根海岸で荷を積みかえて上流へ帰つてゆく。夕暮れどき、川面に数多く帆船が浮かぶ情景はどので風情の眺めであった。

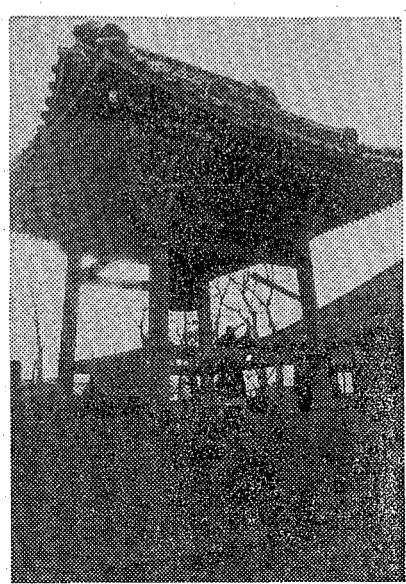
水神の遼雁 元禄十三年(一七〇〇)元荒川改修の際、瓦曾根溜内のみ離島に、川筋の守護として水神が祀られた。これが東小林建築院の水神社

橋。自然とかげ橋の全体的な調和が夕陽に照らされてひときわ美しく映えた。

天蠍の晩鐘 夕べツを告げる天蠍寺の晩鐘は、人びとに活氣ある一日の終わりを告げる。夕暮れのざわめきの中、鐘の音が余韻を残す。

こうした数々の情緒ある風情は、今

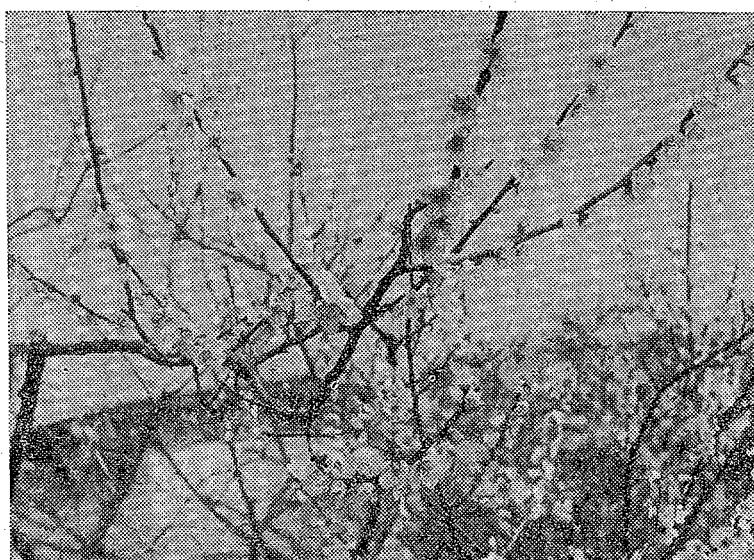
はもう少ない。しかし自然と都市が調和した新しい「越谷八景」は私たちがつくり出していきたいものである。



越谷八景のひとつ、天蠍寺の晩鐘



暖ぐらに帰る椋鳥（むくどり）の群れ…宮内庁越谷鴨場



春

その花の香が珍重され、「古今集」などよく詠（よ）まれた梅はいにしえより人びとに愛されてきた。寒けぬとある「むわも梅見客」

土手の猫柳が芽ぶき、春の訪れを告げる。人びとは梅の香りに春を知る。

つくしが芽を出し、すみれがかれん

な花を咲かせはじめると、北越谷の元

荒川堤は、大勢の花見客で引きあさらない。

春に三百の晴れなしとはよく言

われることであるが、散りゆく桜の風

情もまた格別の趣きがある。

葉桜の季節に入ると、樹々の緑はい

いそゞの濃さを増していく。むらむら

き色の藤の花房が緑に映えて美しい。

藤といえど久伊豆の藤といわれるほど、久伊豆神社には遠来の客が訪れる。

うつむくと晴れた日に、やわらかな風が吹きわたる。風にあらぐ風景のまほろばは、まさに風が光っているよ

うに感じられる。

まほろばはからの新緑のなか、越谷の春はひつて闇（だ）けてゆく。

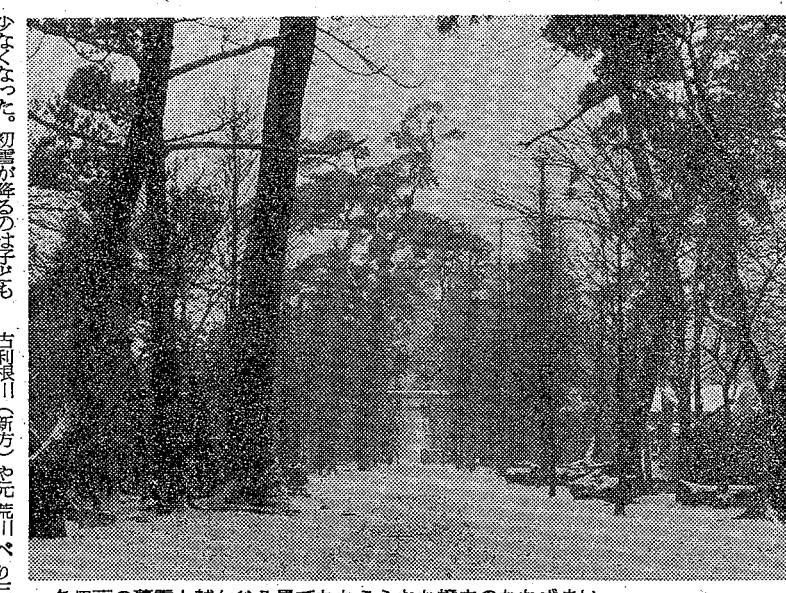
ながら群れをなして飛んでいるさまが見られ、暖秋の景色にふさわしい。椋鳥は、渡り鳥などからって、日本内地を気候の寒暖によって動く。

## 四季の越谷

水郷こしがやの秋には、夕焼けがよく似合う。宮内庁越谷鴨場では、寝ぐらに帰る椋鳥たちが鳴き声を交わしながら群れをなして飛んでいるさまが見られ、暖秋の景色にふさわしい。椋鳥は、渡り鳥などからって、日本内地を気候の寒暖によって動く。

冬

北風が葉の落ちつくした枯木立のあいだを吹きぬけていく。けやきやいちょうなどの落葉樹の多い越谷は、以前よりはその数が少なくなったといえ、武藏野の冬のたたずまいを見せる。



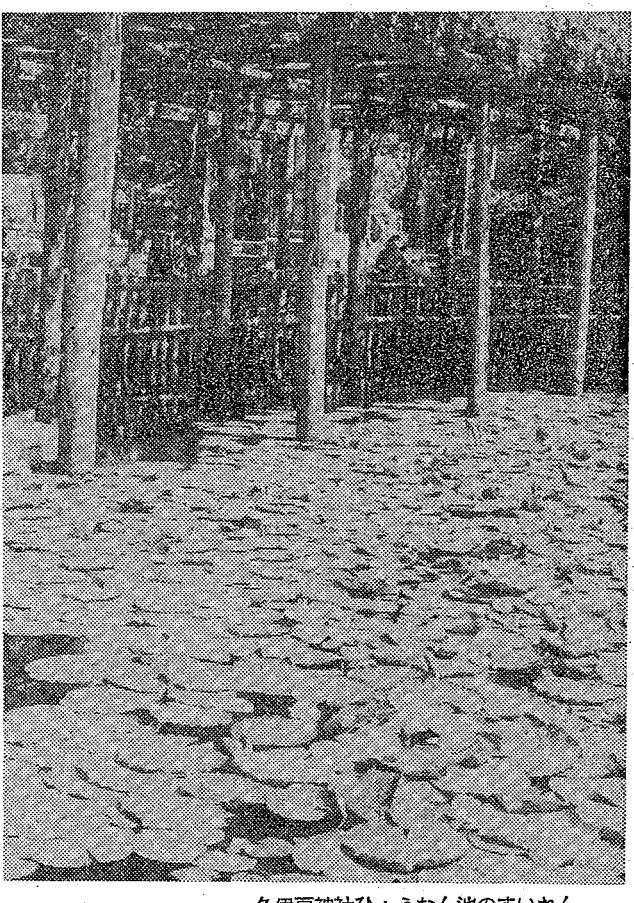
久伊豆の暮雪と越ヶ谷八景でたたえられた境内のたたずまい

夏

盛夏のころ、久伊豆神社のひょうた

ん池には、蓮似たすいの白い花が咲く。すいれんは、朝靄を含んで咲き夕邊にはすこし花をじける。この名がある。葉のあいだに白い花が無数に咲き、真夏の日光を浴びて光り輝くさまはまことに美しい。ことに花の落ちたあと緑の萼（がく）がきれいだ、「蓮のうてな」とはまだ

三五五散歩している人たちの姿が見られる。若葉若葉を繁らせたさかんな夏木立の下をくぐるのも清々しい。夕立ちが去ったあと、樹々の緑がしつらと映える。日がらしの声がままずい。



久伊豆神社ひょうたん池のすいれん

## ふるさと歲時記・四季の越谷

### 越谷わがまち

昭和十九年に町八か村が合併して越谷町となつた頃には翻訳業として、越ヶ谷町の文化活動をしており、一週間に一回、元荒川沿いに梅林、桃畑を抜け、ご満場（現宮内府内）の越ヶ谷町立図書館へ徒歩で通り、参考図書を閲覧し、日々の暮れを忘れた。

冬暖の洲に来て朝の氷賀密く水と緑と太陽に恵まれた当時は、前述の豊かな自然をのこしつつ、如何に計画的に都市つくりをすこしにくかが大きな問題で、ともすれば荒々しく都市化の波にさらわれそうである。

昭和四十一年に越谷を知りたい、研究したい、古くからある伝説及び資料を尊重してこれを郷土愛の觀点から調査研究したいという新旧住民の意向により、越谷市郷土研究会を組織され、これに昭和四十五年に越谷市文化連盟が結成され、年一回の成績を問うべく奉納する文化祭も、市及び教育委員会との共催で第一〇回を数えるに至った。



昭和二十三年東京の中野から大袋町大道本田に移り住んだ。農家はわずかで少なく、四季の変化が鮮やかに感じられた。夕暮には農耕用の牛の声に包まれる。元荒川はすぐ近く、休日には河畔を散歩した。

いわたこの付近から元荒川までは梅林で覆われたる香に匂（むせ）んだ。まれば古利根川まで足をのばす。満々と水を湛えている。

投網打つ人に日暮ゆる春の利根

古利根川（新方）や元荒川（ベリ三野）

少ないもと暮じるものだが、水郷に降る雪は美しい。大落

ことだない。

さすが水郷越谷であるを感じた。

昭和三十三年十一月市制が施行され、翌年越谷市立図書館に勤務する

じれた。夕暮には農耕用の牛の声に

包まれる。元荒川はすぐ近く、休日には河畔を散歩した。

河畔を散歩した。







